

特集

エヴァンゲリオン新劇場版：Q

アニメーション映画「エヴァンゲリオン新劇場版：Q」は、今から17年前の1995年にテレビ放映され、1997年に映画化された「新世紀エヴァンゲリオン」をベースにスタートした「新劇場版」シリーズ4部作の第3部に当たります。

「新世紀エヴァンゲリオン」は、汎用人型決戦兵器と呼ばれるメカに乗って正体不明の「使徒」と呼ばれる敵と戦う少年少女たちの姿を描いたアニメーション作品で、それまでにない登場人物の内面描写や謎に満ちた物語などが話題を呼び、社会現象とも言えるブームを巻き起こしました。

2007年には新劇場版第1部「序」が、2009年には第2部「破」が公開され、それぞれ約20億円と約40億円の興行収入を上げるなど、1995年当時は作品を見ていなかった若い世代や女性層など、新しい観客も巻き込んだの大ヒットとなりました。そして、11月17日に公開された第3部「Q」は公開週末のオープニング興行収入11億3351万円と、前作以上の成績が予想されています。

今回は、映画の内容について語るのではなく、新劇場版がどのように作られ、宣伝広告され、観客のもとに届けられたのかという視点で特集をします。また、製作母体となった「カラー」という会社や、映画監督・プロデューサー・会社経営者など多様な顔を持つ庵野秀明氏自身について、5人の方に語ってもらいました。

EVANGELION:3.0

YOU CAN (NOT) REDO.

作品について

「エヴァンゲリオン新劇場版:Q」で、原作・脚本・総監督を務める庵野秀明氏は、1960年に山口県宇部市で生まれた。大阪芸術大学在学中にアマチュア映画集団「DAICON FILM」に所属し、「DAICON III オープニングアニメ」などで注目を集める。1984年に宮崎駿監督作品「風の谷のナウシカ」で巨神兵の原画を担当するなどアニメーターとして活躍した後、「トップをねらえ！」(1988)、「ふしぎの海のナディア」(1990)などでアニメーション監督を担当。1995年に放映が開始されたテレビシリーズ「新世紀エヴァンゲリオン」は大きな話題を呼び、1997年には劇場版が公開された。その後、「ラブ&ポップ」(1998)、「彼女彼女の事情」(1998)、「式日」(2000)、「キューティーハニー」(2004)などの作品を手掛けた後、自らが代表を務める会社「カラー」を立ち上げ、「エヴァンゲリオン新劇場版」シリーズの制作に入る。その第1部「序」は2007年9月1日、第2部「破」は2009年6月27日に劇場公開され、「Q」は第3部となる。

この「新劇場版」における最大の特徴は、「カラー」が製作の全責任を負っていることにある。通常、アニメーション作品を作る場合は、「製作委員会方式」という、いくつかの企業が共同で出資をしリスクも分散するというかたちが取られることが多い。しかし、本作の製作はカラー1社。また、配給や宣伝についてもカラーが中心となって携わり、作品の入り口から出口までをコントロールするシンプルなかたちとなっている。ジョージ・ルーカス率いるルーカスフィルムが同じように独立した製作形態を維持していたが、つい先日、ウォルト・ディズニー・カンパニーに買収された。低予算のインディーズフィルムは別として、アニメーションという数百人のスタッフが携わる作品を、このような形で製作することは非常にまれであると言えるだろう。

原作・脚本 | 庵野秀明

主・キャラクターデザイン | 貞本義行 主・メカニックデザイン | 山下いくと

総作画監督 | 本田雄 作画監督 | 林明美、井上俊之

特技監督 | 増尾昭一 副監督 | 中山勝一、小松田大全

総演出 | 鈴木清崇(タツノコプロ) 色彩設定 | 菊地和子(Wish)

美術監督 | 加藤浩(ととにゃん)、申田達也 CGI監督 | 鬼塚大輔、小林浩康

撮影監督 | 富士享(T2スタジオ) 編集 | 李英美 音楽 | 鷺巣詩郎

制作 | スタジオカラー 共同配給 | ティ・ジョイ、カラー 宣伝 | カラー 製作 | カラー

監督 | 摩砂雪、前田真宏、鶴巻和哉 総監督 | 庵野秀明

2012年 | 日本 | カラー | DCP | カラーズコープ | 95分 | 5.1ch

©カラー

「アニメーションの感動」を 伝道し続ける「エヴァンゲリオン」

氷川竜介



アニメーションへの愛が基本にある

「エヴァンゲリオン新劇場版…Q」公開の直前、「ヒットの要因は?」「魅力は?」という取材をよく受けた。無い知恵を絞って期待される回答を返しはするものの、言葉にしたとたん本質から遠ざかる気がして、心苦しさも感じていた。今回は「そんな予定調和的な話ではない自分の本音で語れ」という依頼だと解釈し、「エヴァの本質とは何か」という観点で述べてみたい。

筆者は「エヴァンゲリオン新劇場版」の公式ライターとしてプレスシート、パンフレット、フリーペーパーなど宣材類、DVD・ブルーレイなどの解説書、公開後にスタジ

オカラーから発行されるメイキング本『全記録全集』と、オフィシャル刊行物のインタビュ、ライティングを一貫して引き受けてきた。プロジェクト参加の動機は、庵野秀明監督が掲げた「エヴァを使ってエヴァを超えたい」という難しい目標に、同じアニメファンとしての「心意気」を共感したことにある。

筆者自身、アニメから受けた恩恵には多大なものがあると思いき、いくばくかでもお返ししようとして二〇〇一年に一八年近くの会社勤務を辞してフルタイム文筆業となった。目は、「なぜアニメは面白いのか」という大前提過ぎて避けられている疑問の答えを求めることにある。そのヒントが「エヴァ」の再起動にある気がして、その直感に賭けたのである。実際の取材で見聞きしたこと共通するのは「ギ

リギリまで妥協しない姿勢」で、「エヴァ」の現場こそが「ものづくり本来の姿」ではないかと感じる局面も多々あった。その求道的な姿勢こそ、閉じかけているアニメの可能性に新風をふきこむものだという予感、現在進行形で現実のものになりつつある。

そんな現場を率いる庵野秀明総監督の「アニメーションを愛する気持ち」は、「新劇場版シリーズ」製作発表時、自身で書かれた所信表明に切々と綴られている。六年前のものだが現在までまったくブレがなく、全文を読めば解説はまったく不要なほどのものだ。ここでは関連する部分を引用してみよう。

『「エヴァンゲリオン」という映像作品は、様々な願いで作られています。

自分の正直な気分というものをフィルムに定着させたという願い。アニメーション映像が持っているイメージの具現化、表現の多様さ、原始的な感情に触れる、本来の面白さを一人でも多くの人に伝えたいという願い。疲弊する閉塞感を打破したいという願い。

現実世界で生きていく心の強さを持ち続けたい、という願い。今一度、これらの願いを具現化したいという願い。

そのために今、我々が出来るベストな方法がエヴァンゲリオン再映画化でした」(改行位置は引用者が変更)。

あくまでもアニメーションに対する熱意ありき、伝えたい願いありき。面白いフィルムを作って観客を楽しませるサービスありき。その手段が「エヴァ」である。この「優先順位」、これが大事だ。「エヴァ」というコンテンツが……「経済効果が……」というところさえ方自体、本質を探る観点ではまったくもって主客転倒である。発信源となるアニメーション作品がまず人の心を打たなければ、何の経済活動も生まれない。送り手の「熱意」が受け手の「熱意」へと伝搬し、魂が響き合わなければ、何をやってもムダだ。

この考え方は「新劇場版」のフィルムをよく観察すれば、皮肉めいた暗喩として盛り込まれているが、ここでは深入りしない。

進化する技術で感動の原点を体験

「願い」のうち「原始的な感情に触れる」という点は、第1部「序」の公開初日、満席となった劇場で筆者は感慨深く受け止めた。結局のところアニメーション映画とは「光と音の饗宴」だという再確認だった。そして大勢で暗闇の

中で共有する「体験性」こそが、「アニメが好き」という気持ちの原点だと思いつくし、まるで高校生、大学生の時に戻ったかのような高揚感が心地よかつた。

その興奮を喚起する手段のひとつが、デジタル化で圧倒的に向上した「画と音」の表現力である。当初は「リビルド（再構築）」というキーワードを強調し、一九九五年に放送されたTVシリーズ「新世紀エヴァンゲリオン」の現存する原画やレイアウトに適切なディテールアップや修正を行い、場合によってCGを加えてデジタルで撮影し直している。CGの先鋭的で堅い質感の映像と、アニメーションの伝統的な柔らかい動きは、なかなか調和しない。その課題に庵野秀明監督以下、スタジオオカラーに集まったスタッフはさまざまな挑戦をしている。プロダクションの飛び出しや兵装ビルなど、堅いものに精密な存在感を与えるのもそのひとつだ。「使徒」の表現もフィルム後半になるにつれてフルCGに近づいて自由度を増し、映画の大スクリーンに映える仕上がりとなった。

特筆すべきは「CGを特撮のミニチュアセットに見立てる」という発想である。クライマックスの「ヤシマ作戦」では、日本中から高出力の電力を集めるための重機や特殊鉄道車両、変圧器や配電設備類がミニチュア的なCGで描かれ、圧巻の物量が映画の興奮に直結する。こうしたビジ

ユアル的な成果は第2部「破」（2009年6月公開）で、さらに磨きがかかる。質量兵器として落下する使徒を三体のEVAシリーズで受け止める作戦シーンにぎつしり並んだビルや民家は、特撮現場のミニチュアセットの図面から作成したCGモデルである。走行するEVAも練度の上がつたCGで実現され、手描き作画に近いレベルに到達した。こうしたミニチュア特撮への憧憬は、まだ記憶に新しい

2012年7月、東京都現代美術館で歴代三位の動員を記録した展覧会「館長庵野秀明 特撮博物館 ミニチュアで見るとの心意気」と述べたが、「テレビまんが」として区別がなかった時代の「アニメ・特撮ファンとしての……」が厳密な言い方になる。少年時代の庵野秀明が草創期のアニメ・特撮作品から、柔らかい感性で受け止めて脳に焼きつけたビジュアルショック。その感覚を最先端のテクノロジーで再生させて次世代に伝える熱意が迫力に昇華する。ネタやパロディ、ノスタルジーなど矮小な姿勢ではなく、かつて心で受けた衝撃と感動を咀嚼し、自身の表現力と価値観で新たな観客へ解き放ち、勝負を仕掛けているのである。映像的記憶を触媒とした壮大なイマジネーションによる映像の甘美さ、その到達点は最新作「Q」を観れば一目瞭然であろう。

以前から何かと「謎解き」というアプローチから語られがちな「エヴァンゲリオン」ではあるが、昭和四〇年代に革命期を迎えたビジュアル文化の発展的継承者である側面には、今後も注目していきたい。

理想の制作環境を自身で構築する試み

注目に値するのは、表現者としての庵野秀明だけではない。妥協のない映像をつくりあげるために自身でカラーという会社を新設し、原作・脚本・総監督のほかに製作・宣伝・配給まで一手に引き受ける体制をつくりあげたことも画期的である。

アニメビジネスの歴史は九〇年代の「新世紀エヴァンゲリオン」の成功により進化し、パッケージ販売を主目的とするビジネススキームが確立、製作委員会方式による通称「深夜アニメ」が二〇〇〇年代以後、流行する。資金調達とリスクヘッジが容易になり、アニメの量産はさまざまなチャンスをもたらした。だがこの方式は「釣り堀式」と揶揄されることも多い。あらかじめ数の読めるファン層に向けて売れ筋の原作を選び、声優、監督、スタッフと、集客力のある人選を積み上げて「方程式」のように成果を試算する、囲いこみ的なビジネスが多いからである。

縮小再生産にもなりかねない製作委員会方式に「NO」をつきつけ、クリエイター個人の裁量ですべての役割を担うハイリスク・ハイリターンを試みが、他ならぬ「エヴァ」自身から出てきたという点が興味深い。第3部「Q」のような挑戦的な内容と表現、事前情報をいっさいシャットアウトするという宣伝の冒険も、個人の美意識のもとに統合されてこそ成立するものと言える。

映像づくり全般で、プロデューサーと監督とは両立しづらい関係にある。監督はクオリティアップのために時間と予算を使えるだけ使おうとするし、プロデューサーは納期を守り利益を出すため、ブレーキをかけて制約をあたえる。ひとつの成果に向かって綱引きのようにせめぎ合う力学があるからこそ、フィルムは完成する。アニメの「商品」と「作品」という二面性も、同様である。

ところが「エヴァ」を「エヴァ」たらしめている最大の要因は、「妥協のないものづくり」にある。庵野秀明総監督の美意識と心意気に支えられた「ここまでやるのか」という他に類を見ないエスカレーションが観客の心に響いて揺さぶり、感動に転化する。そんなクリエイターの願いを理想的に追求しようとすれば、価値観の発信者がすべてのリスクを引き受け勝負をかけるしかない。その目的で、庵野秀明自身はカラーという製作会社とスタジオオカラーとい

う制作現場を設立した。そしてこれを成立させるために「エヴァ」というタイトルで「商品」と「作品」の両面を統合的にコントロールしているのが、「新劇場版」というわけである。

「製作（資金集め）」「制作（映像づくり）」「配給（宣伝・公開・回収）」と3ステップを統合した大規模なフィルムメイキングの事例は、カラーの他にはウォルト・ディズニール、ジョージ・ルーカスなど数例しか思いつかない。少なくとも日本のアニメでは前人未踏の領域で、そこに驚くべき結果を出している。だが、最大の成功要因は「アニメをつくる楽しみを、アニメを観て楽しむ人に伝えたい」という原点にあることは、忘れてはいけない。リスクヘッジと引き替えに劇的变化も鈍りがちで、長期的には衰退を迎えかねないアニメ界へ、「エヴァ」は覚醒を呼びさますショック療法としても機能している。

新たに生まれ続ける「14歳の少年」へ

二〇〇八年に「破」の準備段階の打ち合わせで「宣伝もカラーで行うことになりました」と聞いたとき、筆者は心の底から愉快になり、同時に腹をくくったことをよく覚えている。史上類を見ない「成功コンテンツ」で「アニメビ

ジネスのトップ」にいると思われがちな「エヴァ」が、実はフリーペーパーを手配りするようなインディーズ精神に充ちた野心作で、手作りの心意気をよりどころにしている点に、爽快な共感を覚えたのだ。

そして同時に懐かしい気持ちも甦った。思い起こせば筆者がアニメと特撮への興味を深化させた高校時代の一九七四年、今のようなアニメ雑誌もネットも何も存在せず、ただあるのは作品とファンとの熱い関係性だけだった。そして熱気の持つていく先がないならば、自分たちで「場」を作るしかない。そう思っただけで行動を始め、ファンクラブを結成し、手作りで同人誌をつくった、そんなタイトルが「宇宙戦艦ヤマト」だった。

一九七七年、同作がやはりインディーズ的に映画化されたときも、ファンは総力をあげて手伝っている。それが予想を超えた爆発的ヒットに結びついたのは、歴史的必然であつたとは思ふ。一方で自分もプロの文筆業に片足をつつこみ、「ヤマト」がメジャー化すると同時に寂しさも覚えた。アニメマスコミとビジネススキームと、商業体制が確立したと同時に手作り感が減じたからだ。

しばらく後の一九八一年、プロ顔負けの「妥協しない作り方」をした手作り感満載の自主アニメが出現し、アニメ界全体に衝撃をあたえる。それが他ならぬ庵野秀明らが若

きアマチュア時代に作りあげたSF大会「DAICON III」のオープニングアニメだった。入れ替わりのように、「自分たちの観たいアニメを自分たちで作る」という次のステージが生まれてきたわけだ。こうした原点の確認こそが、肝要な時期が来たとも思った。

「時代がぐるつとまわった。自主でやり、手作りで始める。そこもまたぐくり返しなんだ」という感慨……それさえあれば、自分もまたきつと初心に戻れる気がした。

ここで問題になるのがぐくり返しというキーワードだ。冒頭引用した六年前の庵野秀明総監督の所信表明文章後半には、こう明記してある。

「『エヴァ』はぐくり返しの物語です。主人公が何度も同じ目に遭いながら、ひたすら立ち上がっていく話です。わずかでも前に進もうとする、意思の話です。

曖昧な孤独に耐え他者に触れるのが怖くても一緒にいたいと思う、覚悟の話です」

最近になってこれを再読したとき、筆者は心底戦慄した。路線を大きく変えたとい誤解されがちな「Q」の指針となっていると同時に、さらにメタなカタチで、ここで述べてきたような「『エヴァ』というタイトルを使って、何をした

いか」という姿勢が明示されている。そして一歩ずつ着実に進めた前進は、今や何らかの限界を振りきりつつある。だからなのだ……。結局、ビジネスやコンテンツや作品の表層だけを追っても、本当のことは何も分かりはしない。やつぱりそう言わざるを得ない。

筆者自身、現時点で完全に分かっているわけではない。だからと言って、六年前にここまで明記してあるのに、庵野監督に答えを求めたりするのは愚行だ。後は役割分担にしたがって、行動と成果を出すのみ。それは「エヴァ」の作中で「大人」の登場人物たちが見せてくれる、毅然とした姿勢にも通じる。

結局、分かりにくい話になってしまったかもしれない。ただ、「自分が観たいアニメ映画」を具現化するためにとるべき行動とは、たとえばこういう事例があると、それだけは伝えておきたかった。そこには送り手も受け手も関係ない。冒頭述べた「心意気の共鳴」こそが問われるべきだ。送り手から受け手へとつながっていく感動と価値観の連鎖。その幸福感のストリームの上に、たまたま指標としての「金銭」が乗って流れる仕掛けが、運良く三五年前にできた。筆者はいつでもその前の荒野に戻り、戦いを始め直す覚悟がある。「アニメが好きだ」という確かな情熱がその原動力と確認したから、怖いものはない。

手段や媒体や金銭を問題にする前に、たとえ〱くり返しであつても、〱わずかでも前に進もうとする、意思〱の有無を、各自点検すべき時期が来た。そう思う最大の理由は、「エヴァ」の主人公・碇シンジと同じ「一四歳の少年」は、毎年毎年新たに出てくることにある。

かつて自分が一四歳のときに覚えた感動の、新しい受け皿は永遠に生まれ続けていくという認識。新たな〱彼〱に正面から向かい、何か大事なことを対等に語りかけられるのか。新たな一四歳の少年に対し、かつて一四歳だったことのあるすべての大人が襟を正せるのか。

「エヴァ」が紡ぎ続ける、〱くり返し〱の本質、永遠の問いかけはそこにある。事実、最新作「Q」ではシンジ少年からの視点から、そうしたことが描かれているように思える。常に生まれ続ける「新しい少年」に、「アニメーションとはこんなに面白いんだ」と実作で伝えていく。そのために「エヴァンゲリオン」は新生への道を選んだ。

その観点で、「福音伝道者 (evangelist)」に通じる題名の意味は、重い。

(アニメ特撮研究家 ひかわ・りゆうすけ)

カントク不行届Q

安野モヨコ

カントク不行届Q VOL.1





庵野秀明の考える

「普通じゃないことを、

実現させるのが僕の仕事。

轟木一騎



庵野秀明との出会い

僕はもともとCMの制作会社でディレクターをやっていたのですが、いまは庵野の「助手」として働いています。「エヴァンゲリオン新劇場版」シリーズにおける僕の役割は総監督である庵野の助手と、総監督以外に本来は庵野がやるべきだけできない部分をフォローすることだと思っています。それは宣伝や配給であったり、パンフレットや全記録全集など書籍の編集とかですね。僕は、庵野の宣伝についての考え方やグラフィックデザインのセンスが、ほんとにすごいと思っていますので、本来であれば庵野自身が全部手掛けられればベストだと思います。しかし、作品をつくっているとそこま

での時間はとれませんので、宣伝のコントロールをしたり、ポスターをつくったりなど、庵野の代わりにやっているという感覚です。

僕が庵野と出会ったのは石井克人監督^{*1}の映画「茶の味」(2004)の出演がきっかけでした。石井と僕は美大の同級生で、その後、僕も彼もCM制作会社に入り、後に石井が映画を撮るようになりました。庵野もこの映画に出演しているのですが、庵野はもちろん僕も俳優が本業ではありません。石井は、誰も知らない人間が映画に出ているのが面白いという発想で、僕をキャスティングしたんだと思います。

その映画の中で庵野との共演が1シーンだけあったんです。じつは僕は前から庵野秀明とその作品の大ファンだった

こともあり、ものすごく緊張して挨拶をしたのですが、庵野からは極めて素っ気なく挨拶を返されて……（笑）。まあ向こうからしてみれば僕のは全く知らないわけですから当然といえば当然ですよ。

その後、庵野が監督をした「キューティーハニー」^{*3}（2004）にエキストラで出させてもらって、打ち上げにも参加させてもらう機会がありました。その時は「新世紀エヴァンゲリオン」のDVDボックスをリュックにこっそり潜ませていつて。サインをしてもらおうと思っていたのですが、結局話をする機会もなく、そのまま持つて帰るとかそんな感じでした（笑）。

その後、石井ら友人が「ナイスの森」^{*4}（2005）という映画をつくることになり、今度は庵野と僕が兄弟役で共演したのですが、その打ち上げのときに、ようやくきちんと話をすることができました。その時は、ほとんど一方的に特撮の話ばかりしていたのですが、そこで庵野が進めていた特撮もののテレビシリーズの企画の話を聞いて。僕は大の特撮ファンでもあったので、これはもう庵野のところに行くしかないと思いました。それで、石井を通じて庵野の助手になりましたという話をしてもらい、どういわけかOKになりました。後から庵野に何で助手にしたのか聞いたら、「石井さんが紹介するんだから、まあいいかと思った」のだそうです。

これが助手になったいきさつです。

新会社「カラー」設立

ところが庵野の企画していた特撮テレビシリーズが頓挫してしまっただけです。その後、企画の立ちあがった「エヴァ」と、もうひとつ別のアニメーションの企画が並行してありまして、それらを推進するために、カラーという会社を立ち上げることにになりました。庵野からは、ある日飲み屋に呼ばれて「会社をつくることにしたので、よかつたらどうですか」というようなことを言われて。僕はアニメーションについては全くの門外漢だったので、アニメであろうと庵野の助手として働きたいと思っていましたので、「お願いします」ということで、会社づくりに参加しました。

会社は当初、庵野と僕の2人だけで、キングレコードの大月俊倫さん^{*5}や、当時はスタジオジブリの高橋望さん^{*6}などに力を借りて、よくわからないながらもやっていました。2人とも基本的には無口なので、静かに時が流れている感じでした。

そんなわけでカラーは庵野の個人事務所兼企画会社のようなかたちで立ち上がったのですが、その後加わった「エヴァンゲリオン新劇場版…序」（2007）のアニメーションプロデューサーから、制作の母体となるスタジオをつくりたい

という話が出て、スタジオオカラ^グをつくることになったんです。庵野自身は流れに身を任せて、だったらやってみようかというような感じでした。その一方で、庵野は「序」の脚本を書き、監督の鶴巻和哉^{*7}やプロデューサーの大月さんと打ち合わせをして、徐々に作品制作の体制がかたちづくられていき、スタジオオカ^タも整っていききました。

「エヴァンゲリオン新劇場版」始動

当初、「新劇場版」は、こんなに時間を掛けるつもりはなくて、いわゆる再編集ものの映画としてももう少し気軽に作るつもりでした。ところが、「序」の制作準備をしている段階で、テレビシリーズの素材をリサイクルするテストを繰り返したのですが、いざ始めてみるとやっぱりいろいろと不満な点が出てきてしまっ^て。フィルムをブローアップして、かつデジタル処理をして鑑賞に耐えうるものにするのと、一から作り直す費用とを検証して、さほど変わらなさそうだということになり——そのときは庵野だけでなく、鶴巻や摩砂雪^{*8}らスタッフたちとも話し合っ^て——だったら、全部デジタルで撮影からやり直そうという話になったと記憶しています。

当初からポスターのデザインは僕の仕事になっていましたが、これも庵野と相談しながら進めました。「序」の前に「新

劇場版」シリーズ全体のティーザーポスターをつくるときには、庵野が文字だけのポスターをつくりたいと言いだしたんです。その文字はどうするんですかと聞いたら、「それは僕が文章を書く」といって出来上がったのが、「序」のパンフレットなどにも載っている所信表明の文「我々は再び、何を作ろうとしているのか？」でした。

この中に「中高生のアニメ離れが進行していく中、彼らに向けた作品が必要だと感じます」という一文があります。これは庵野自身が中高生の頃にアニメが好きだったけれど、今の中高生はそんなにアニメを見ていないという事実があった、そういう人たちにもう一度アニメの魅力を感じてほしいという気持ちがあつたんじゃないかと思っ^ています。

結果として「序」は、興収で20億円と予想以上にたくさんのお客さんに観てもらえました。僕も劇場の様子を見たり聞いたりして、前作をリアルタイムには知らない若いお客さんがたくさん来てくれたことを知り、正直驚いたんですね。僕は常々その理由を考えているんですが、グッズやコミックスがずっと出続けていたとか、いくつかの要因はあるとは思いつつ、これだ、と腑に落ちる理由はなく、今でもちよつとわからないんですよ。でも、庵野はそうしたことある程度予想はしていたのか、次の「エヴァンゲリオン新劇場版・破」(2009)が公開されるときも、「序」の倍の40億を目指す

次の「破」の時は2枚ポスターを作ったのですが、そのうちの一枚は、監督の鶴巻が描いた画コンテの絵を使っています。これは最初、ああいった、やばい感じの初号機の絵を庵野に描いてもらおうと思っていたのですが、ちょうどアフ

他とは違うところをざら

と言っていましたね。望みを高くもつのは悪くないからなんて周りは言っていたのですが、本当にその通りになりました。

ジュアルはピアノの写真にしたいと僕もだいぶ前から考えていたので、そこもぴったり合致しました。僕は以前からCMの仕事をしていて、他とは違うことをやる、ひねることで目立たせる、といったようなことが広告に必要だと思っていたのですが、映画の宣伝は、これこれこういう映画です。面白いですから見て下さい、というごく直球なものが多くという印象でした。ただ、それでは宣伝として普通すぎないだろうかという違和感もあって、僕は前の「エヴァ」劇場版のポスターが大好きなのですが、あれ

我々は再び、何を作ろうとしているのか？

「エヴァンゲリオン」という特撮作品は、様々な面で磨かれてきました。

自身の正気な気分というものをフィルムに定着させたいという願い、アニメーション映像が持つ「イメージの具現化、表現の多様さ、創作的な価値」に魅れる、本来の面白さを一人でも多くの人に伝えたいという願い、短期しつつある日本のアニメーションを、本来へつづけないという願い、変化する視聴態度を自覚したいという願い、現実世界で生きていく心の置き場を創りたいという願い。

今一度、これらの願いを具現化したいという願い。

そのために今、我々が出来るベストな方法がエヴァンゲリオン新劇場版化でした。10年以上上のタイトルを再録今更、とも思います。エヴァはもう古い、とも感じます。しかし、この12年間エヴァより新しいアニメはあまりありませんでした。

閉じて閉鎖した現代には技術面ではなく、志を成すことが大切だと思えます。本来アニメーションを支えるファン層であるべき中高生のアニメファンが激減していく中、彼らに向けた作品が必要だと感じます。現状のアニメーションの役に少くとも立ちたいと再考、再びこのタイトル作品に魅れることを決心しました。

映画監督として改めて自分自身、新しい現代版の「エヴァンゲリオン」世界観を構築する。このために従来のポスターデザインとは全く異なる制作スタッフを交わし、眼からの両面視としました。過去にとらわれず、現状に目をす。運命ある未来を描きますためです。早いにも制作からのスタッフ、新たに参入してくるスタッフと素晴らしい関係が構築しつつあります。制作以上の作品を作っている気持が伝わります。

「エヴァ」はくり返し観る価値です。主人公が何よりも同じ目に描いていこう、ひたすら立ち上がっていく姿です。ひたすら立ち上がる姿、並の姿です。戦場や戦場に身を置く者になるのが怖い、でも一線にいたいと思え、覚悟の証です。同じ戦場からまた立ち上がりたくてへっぺ化していくこの作品を、楽しんでいただければ幸いです。

最後に、我々の仕事はサービス業でもありません。当然ながら、エヴァンゲリオンを知らない人たちが魅れたいという、劇場映画として面白さを願うし、世界観を再構築し、誰もが楽しめるエンターテインメント作品を目指します。

2007年秋秋、劇場版下さい。

原作／総監督 庵野秀明
2006.09.29 庵野秀明 庵野秀明

エヴァンゲリオン新劇場版 2007年9月1日公開

「エヴァンゲリオン新劇場版」シリーズポスター

レコの時に流れたコンテのこの絵を見て、これだけけるんじゃないかと。コンテサイズの小さな絵を無理矢理B全サイズに拡大するという素人ならではの無茶なアイデアだったのですが（笑）、庵野には即OKをもらえました。

今回の「エヴァンゲリオン新劇場版…Q」の特報では、ピアノの映像や伴奏が使われていますが、これも庵野が言い出したことです。僕も特報をつくるにあたっては、あのピアノ曲を使いたいとは思っています、ただ映像は本編のものを想定していたのですが、庵野は映像もピアノだと*。それでも昔の「エヴァンゲリオン」の予告なんかを知っている身からすると、全く違和感はなかったですね。ポスターのビ



「エヴァンゲリオン新劇場版:Q」ポスターA



「エヴァンゲリオン新劇場版:破」ポスターB

も、庵野が何か他とは違うことをやりたいと考えてつくったんだと思います。それがすごくかっこよかったんですね。他にも、テレビの次回予告で台本だけを映すとか、すごく刺激を受けたし、やり方がかっこいいと思っていました。だから、僕がやるにしても、他とは何かちょっと違うことをやりたい気持ちにはあつて、そういった感覚は庵野とも共通しているところがあると思います。

宣伝自体の大本の方針は庵野が考えます。僕は庵野から話を聞いて——それは改まった宣伝会議みたいなものではなく、席が隣なので何となく聞くという感じですが、それに沿って具体的なことを考えていきます。庵野から見てもどのくらい当たっているのかはわかりませんが、もともと好きなものが似ているという土壌はあるので、おそらく庵野の感覚に近いものができているのではないかと、ある程度の自信はあります。

「Q」: バルト9 壁面で新作予告を上映

今回の「Q」から、映画の共同配給をティ・ジョイがやってくださることになり、担当の紀伊宗之さん^{*10}から、映画館ならではの宣伝の一環として、新宿バルト9の建物の壁面に何かを映したいんですという話がありました。そのときは「序」

と「破」の映像を使った、いわゆるVJ的な映像を壁面に流したいという話だったのですが、それを聞いた庵野が、だったら新作の「Q」の映像を使った予告を映そうと。

新劇場版の公式サイトとカラーのサイトで、「EVAーEXTRA 08」と銘打って、7月1日21時からバルト9壁面にて上映という告知だけをしたのですが、どのくらいの人が集まるのか想像は付きませんでした。紀伊さんは「やってまえー」という勢いでしたが(笑)、僕なんかはあまり人が集まりすぎて事故があつたらどうしようなどと心配ばかりして。もちろん紀伊さんも不安や心配はあつたとは思いますが、決断や対処は大胆かつ的確でしたね。当日は生憎の雨だったのですが、それでも5000人が集まって、結果としては大きな事故やトラブルもありませんでしたから良かったと思います。

でも、上映まではいろんなこともあって。僕らは当然、紀伊さんたちが技術的なことも含めて全部確認したうえでこの提案があつたのだろうと思っていたのですが、どうも壁面に映像を映したいという思いだけが先にあつて、「壁が白いからいけるんちゃう、細かいことは後で考えればええわ」くらいのことだったらしいです(笑)。僕も後から聞いてちょっとびっくりしましたが、そんな、すごく男らしい人なんですよ(笑)、紀伊さんというのはい。

この上映では、現地でのカメラ撮影など多くに何の制限もかけませんでした。もちろん、撮影してくださいとこつちから言ったわけでもありませんが、当然、みんな携帯なりで動画を撮るだろうと。今はみんなポケットの中にビデオカメラが入っていて、YouTubeのような放送局につながっているから、きつとそれ自身が広告になるだろうと考えました。

庵野もよく言っているのですが、普通にマスコミ媒体にリリースをまいてみたいなことではなくて、出来るだけ普通じゃないルートで情報を出したいと。映画館の壁面ですら情報を出すということは、他の映画ではやらないだろうから面白いということなんです。

映画である以上は興行的にも成功してほしいので、その結果につながると言うことをやるだけです。そのための道はどれでもいいということなんです。決して情報を出さないといいだけではなく、本編の映像を使った方が効果的なのであればそうするし、本編とは関係ない映像を流した方がいいと思つたとしたらそうする。うちはあまり宣伝費も多くないですから、その時々で効率的なやり方を考えるようにしています。

目指せ、ジブリ

前のテレビシリーズや劇場版のときには、社会現象と言わ

れるようなブームがあったと思うんですが、今回の「新劇場版」に関しては、そういう感じではないと思っています。一部の熱狂的なファンがいてという感じではなく、むしろ若い人とか女性とか、この人が「エヴァンゲリオン」を見てくれるのかみたいなお客さんも含めて、いわゆる普通にみんなが見てくれる映画——アニメ云々ということではなくて、お客さんが入る映画のひとつを目指したいと思っています。これは庵野がいつも言うんですが、「目指せ、ジブリ」です（笑）。世の中の人はジブリの作品を、アニメというカテゴリーにこだわらず、普通に映画として認識していますよね。そういうのを目指したいというのはよく言っています。

そう言えば、今回「巨神兵東京に現わる」が同時上映で「エヴァ」本編の前についたことよって、トトロのマークが冒頭に出るのですが、庵野はそれをほんとに喜んでいました（笑）。まあ冗談か本気かわからないんですが、ほんとには「エヴァンゲリオン」の頭にトトロのマークをつけたい、スタジオジブリ作品の「エヴァンゲリオン」をつくりたいんだって言うってますから。

会社をつくる際も、スタジオジブリはどんなのかというところを参考にさせてもらっていました。やっぱりスタジオジブリなり、宮崎さん、鈴木さんというのは、庵野の中で目標であり、教えを乞う人というのがあるんだと思います。

僕自身は庵野のプロデューサーになりたいとは思わないです。鈴木さんは性格も真逆だと思っています。もちろん宮崎さんと庵野も違うでしょう。ただ、夏の東京都現代美術館での「特撮博物館」*11で鈴木さんと少しだけお付き合いをさせていただいて、具体的なやり方は違えど、宮崎さんと鈴木さんの関係は、庵野と僕の関係に近いものがあるかもしれないと思います。

映画公開前日に、本編の冒頭をTV放映

映画公開の前日に、前作の「破」をテレビ放映したのですが、その最後に「Q」の冒頭6分38秒を流したいと提案したのも庵野です。じつはあれはかねてからの念願だったんだそうです。ずっと前、庵野が「ラブ&ポップ」をつくったときにやりたいと思っていたと。「ラブ&ポップ」は公開当時テレビ特番が放送され、結果的には撮影風景とかキャストやスタッフのインタビュが流れるような、いわゆる普通の映画の宣伝番組になったのですが、庵野はそこで「ラブ&ポップ」の冒頭30分を流してくれと言ったらいいですね。でもそのときは叶わなかった。だから公開前日にもし「破」が放映できたら、「Q」の冒頭を流したいというのは、ほんとうにごく初期から言っていました。

「広くお客さんに見てもらうためだったら冒頭6分38秒を出すのも厭わない。これは僕も少し戸惑いましたね。流しちゃうんだ、と。そういう一種大胆な考えができるというのが、やつぱり庵野はすごいなと思います。僕は正直、不安もありました。それは、自分がお客さんだったらどうだろうと考えたからです。映画館で明日から流れるものの一部を、テレビで見たくないんじゃないかって。そんなファンの方も多かったと思いますし、これによって、かえってサービースに反することになっちゃうと嫌だなとは思いました。」

ただ、放映がテレビの地上波であると考えると、もちろんファンの方も見てくださっているけれど、ファンではない方が作品に接する数少ない貴重な機会なんですよ。2週連続で「序」と「破」をテレビ放映するのは今回の宣伝の最も大きな山場と考えていましたから、そこでその続きである3作目のさわりを見せるというのは、「エヴァ」ファン以外のたまたまちよつと興味があつて見てくれた人にとつて、すごくいい宣伝になるし、劇場に足を運びきっかけになり得るのではないか。だから多少のリスクはあつても、より多くのお客さんに「Q」を知っていただけるきっかけになると考えました。

弟子ではなく、助手

僕は庵野の「弟子」ではないんです。必ず「助手」と言うようにしています。まあ、いわば「バットマン」のロビンみたいなポジションですね(笑)。バットマンがバットモービルを運転する傍らで、ロビンは助手席に座っているじゃないですか。庵野も車に乗るのですが、僕はペーパードライバーで運転ができないので、必ず助手席に座るんです。一時期よく轟木も運転してよと庵野から言われたのですが、ロビンはいつも助手席に乗ってるからこれでいいと思っています(笑)。

まあそれは冗談としても、もともと僕がかつて一ファンだったころ、庵野がつくる作品はもちろん、それ以上に庵野の作品づくりに対する姿勢にすごく刺激を受けましたし、尊敬もしていました。テレビや映画のギリギリな状況での制作過程も含めて、すごく真摯なものづくりをする人だと思っていました。その頃は自分もいちおう監督の端くれでしたから、そういう姿勢が本当に尊敬できたんですね。

こう言ううと生意気ですが、僕もつくり手のひとりとして、そんな庵野のものづくりを手伝いたい。だから、世の中が何と言おうと、庵野がつくっているものがいいと思う時はいいと言うし、間違っていると思つたらそう言いたい。「下」で

はなく「ななめ下」についているような感覚なんです、僕としては。「弟子」だと、いつかは師匠を超えなきゃならない気がするんです。でも僕は自分のつくるものなんかより、ひとつでも多く庵野作品が観たい。そのために、これからも出来るだけお手伝いしていきたいと思っています。だから、「弟子ではなく、助手」なんです。(談)

〔エヴァンゲリオン新劇場版〕総監督助手

とどろき・いつき

〔注〕

*1……石井克人／1966年生まれ。CMディレクターを経て映画監督へ。代表作は「鮫肌男と桃尻女」、「PARTY7」、「山のあなた」徳市の恋」など。

*2……「茶の味」／原作・脚本・監督・編集・石井克人。2004年度カンヌ映画祭監督週間オープニング作品。庵野秀明はアニメーションの監督役、轟木一騎は轟木一騎という漫画家役でそれぞれ出演している。

*3……「キューティーハニー」／監督庵野秀明による「ラブ&ポップ」
「式日」に続く実写映画作品。主演の如月ハニー役を佐藤江梨子が演じた。

*4……「ナイスの森」／正式タイトルは「ナイスの森〜The First Contact〜」。石井克人、三木俊一郎、ANKIの3人のユニットナ

イスの森が原作・脚本・監督・編集を担当したオムニバスムービー。轟木一騎と庵野秀明は、その中の一篇でハスター兄弟を演じた。

*5……大月俊倫／キングレコード、エグゼクティブ・プロデューサー。詳細はP30を参照。

*6……高橋望／日本テレビ、プロデューサー。元スタジオブリ制作プロデューサー。「海がきこえる」「猫の恩返し」「サマーウォーズ」のおかみこどもの雨と雪」などを手掛ける。

*7……鶴巻和哉／1966年生まれ。アニメーター、アニメーション監督。「新世紀エヴァンゲリオン」では副監督、「エヴァンゲリオン新劇場版」シリーズでは監督を務める。

*8……摩砂雪／1961年生まれ。アニメーター、アニメーション演出家。「新世紀エヴァンゲリオン」では鶴巻和哉と共に副監督を、「エヴァンゲリオン新劇場版」シリーズでは監督を務める。

*9……「エヴァンゲリオン新劇場版：Q」特報／<http://www.evangelion.co.jp/trailer.html>参照。

*10……紀伊宗之／1970年生まれ。「エヴァンゲリオン新劇場版：Q」で共同配給を手掛けた株式会社ティ・ジョイ所属。新宿バルト9など、経営する映画館の特質を活かした様々なプロモーションを手掛けている。

*11……特撮博物館／正式タイトルは「館長 庵野秀明 特撮博物館 ミニチュアで見ると昭和平成の技」2012年7月〜10月に東京都現代美術館で開催された。特撮ミニチュアの展示や新作特撮短編映画「巨神兵東京に現わる」などを上映。約29万人が来場。

私はやり直すことに決めた

大月俊倫



映画公開前にジブリ出版部の額田さんと斉藤さんから、長いインタビューを受けて原稿にまでしていただいたのだが、読んでみると、自分の話し方のせいで自身の現実と違う部分が散見した。なのでインタビュー形式ではなく自身の執筆原稿に変更させていただいた。

本当に申し訳なく思う。

額田さん、斉藤さん、ごめんなさい。

お二人が起こしてくださった原稿はのべ65000字にものぼり壮観であった、見事な原稿であった。それでもわがままを言って執筆原稿にさせていただいた。

変化を感じるようになったきっかけ

私は来月で51歳になるが、この50年間はいったいなんだつたのかと思う。まるで中身がない。同世代の他の人間を本当に羨ましく思い、私自身の成長ぶりを本当に情けなく思う。日々生き恥をさらしていることを実感している。

最近ホームレスの人が路上で売っている雑誌をマメに購入するようになった。しかし都内で雑誌を売っているホームレスの人の姿を見るのは少なくなつたような気がしていた。私があの人達の姿を見るようになってから、実際に雑誌を買っ

ている人の姿を見たのは一度だけである。その人は、少し小太りのメガネをかけた若い女性であった。ただフツーにお金を払ってホームレスの人から薄い雑誌を受け取っていた。

私はその時、その女性が不思議なオーラに包まれているように見えた。そのオーラが何なのかは、いまま私には分からない。ただほんの一瞬の出来事であったが、私には忘れ難い印象を残した。

あれから幾度も、様々な駅の前でホームレスの人達が300円で雑誌を売っているのは見た。そしてあのメガネをかけた若い女性のこと、彼女は特別な感性と考えを持っている人で、私には関係ない人だと思っていた。

しかし、2012年10月のある日、ある出来事がきっかけで、それによって私は数日後にホームレスの人から雑誌を購入する少しばかりの勇気を手に入れたのだ。それは平日の昼間の高円寺駅北口の一角だった。私は会社にも行かず、高円寺で昼食を済ませ日用品の買い物をしていた。仕事とか、お金儲けとか、会社とかがもうどうでもよくなっていた。その数日前にあつたある出来事から、私に変化が現われていたのだった。それは、優しくなつたとか、大人になつたなどとは違う、ひんまがつた日々の緊張から解き放たれた感じの変化であつた。

孤独と孤立は違う

右手に雑誌を持って、声高に「買ってください」とアピールすることもなくホームレスの山田さん(仮名)は、黙つてうつむいて立っていた。

細身で色の浅黒い中年の人だった。

「ゲゲゲの鬼太郎」のイラストが表紙のバックナンバーを見つけた私は、これをくださいと指さした。

「ありがとうございます。300円です」と山田さん(仮名)は言つて、一冊取り出してくれた。雑誌は一冊ごとにキレイに半透明のビニール袋に封入されており、代金を受け取る際にしっかりとナンバーと名前が記載されている名札を見せてくださった。それは正式な販売許可証らしく、販売員の誰もが首からぶら下げているようだ。雑誌の代金は300円で、そのうち160円が販売員の収入になると雑誌の表紙に書いてあつた。

この雑誌が一日何冊売れるのだろうか、売れた冊数がこの人の一日の収入になるのだろうか。しかし私はこの販売員の山田さん(仮名)が、代金の300円を受け取る時よりも、バックナンバーを取り出す時の方が嬉しそうにしているように感じたのだ。働いている喜びというか、今ここで他人に認識

してもらえたという感謝なのか、売るとか買うとかという売買の行為を超えた何かを私は山田さん（仮名）から感じた。

正直、私はかなり感動した。

参った。

感謝や感激はカタチではなかなか表現できないけれど、もし世の中に純粹な喜びと定義できるものがあるとすれば、あの時の山田さん（仮名）の表情がそうであったような気がする。道行く人々は、山田さん（仮名）が一人で立っている時には、目をそらすようにして通り過ぎて行くのに、私が彼から雑誌を購入している時は、その姿をハッキリと見ているような気がした。

これは個人的な見解なので応用は効かないものと前提したうえで書くが、もし強い負の感情が自身の内に巻き起こった時には、ホームレスの人達から雑誌を購入してみることをオススメする。何か溜め込んでいたギスギスした感情が静かに消えてゆく感じがする。

我々人類は社会的な生物であるから、幸福の独占という現実はありません。世界史に残る独裁者達が、いずれも悲劇的

な最後を飾っているのもその表れである。

我々は他人と喜びを共有することでしか幸福は得られない。他者の喜びを自己の喜びとできない人間には、生涯幸福は訪れない。

幸福とは共存である。

不幸とは孤立である。

孤独は、本人が選んだ姿であるので不幸とは違う。

そして孤立と孤独とは違う。

孤独はその人にしか分からないが、孤立は誰の目にも明らかなのである。

「千日回峰行」の概要

比叡山で行われた最も厳しい修行と言われるのが「千日回峰行」である。

東京マラソンは一日で40キロを走るスポーツであるが、比叡山の「千日回峰行」は7年間をかけて42、195キロを千回歩くようなものである。その距離は4万キロメートル。地球を一周できる距離だ。

一年間で40キロを、100回もしくは200回歩く。40キロを2日も3日もかけて歩くのではなく、一晩中かけて歩き

続けるのである。いくらフルマラソンが好きな人でも年に100回なんてまず走る気にならないし、その前に肉体が悲鳴をあげるであろう。

まさに修業、人間技ではない。

私は本当に恥ずかしいのだが最近この「千日回峰行」の事実を知った。他のどうでもよいようなことばかり知っていたりするが、こんな驚くような事実を私は知らなかった。

先の雑誌購入の一件と、かなり近いタイミングでこの壮絶な修業の事実を知ったので、ある出来事以来、落ち込んでいた私にとっては人間再生のチャンス为天が与えてくれた感すらあった。

この、「千日回峰行」をやり遂げた二人の人物、酒井雄哉さんと塩沼亮潤さんの著作を何冊か読み、NHKスペシャルの「千日回峰行」のDVDを購入した。まさに衝撃の連続であった。

私は2011年2月に東京マラソンに参加して完走したが、なかなか大変な作業であった。はじめてのマラソンがフルマラソン、というのも冒険といえば冒険であったが、30キロを越えたあたりから、本当に足が重くて重くて持ち上がらなかつたのである。

東京マラソンの翌日、仕事なので朝6時半に起きて、ドシ

ヤ降りの雨の中、私は羽田空港から福岡空港へ向けて飛び立った。そして内心で「エライぞ、俺」と思っていた。

しかし「千日回峰行」は年に100回から200回、7年間ぶつ通しで比叡山の山道を夜中に走るのである。50年で一回だけのフルマラソンを走り終えて「エライぞ、俺」なんて思っている私は、どんなに小人物なんだとも同時に思っていた。

情けない。

くだらない男。

50年間も生きてきて、そんな価値観しか持ち得なかつた男。私のヘラヘラした自己への思い入れは「千日回峰行」という現実の前に崩れ去った。

何より変わったこと

私は2012年11月13日から、自宅から会社まで雨の日以外は自転車通勤するようにした。会社から、どこかに打ち合わせに行く時も極力、自転車に乗るようになった。

朝はどんな状態でも6時には起きるようになった、夜も25時までには寝るようになった。タクシーを使って帰宅することがほとんどなくなった。

何より変わったのは、つまらない愚痴を言わなくなつたこ

とだろうか。愚痴を言ったり、現状を否定する前にまず動くことを覚えた。どれだけ動いても日中は意気軒昂で疲れ知らずなのだが、年のせいかな朝起きた時に体がイタイ。今もイタイ。これまでぶつたるんだ暮らしをしていたしつぺ返しが私の肉体を襲っているのだ。それとお酒を飲む気がなくなつたのも大きな喜びだった。

1日2食で山の中を毎日夜中に40キロ歩いている人がいるのに、その同じ時間にヘラヘラと酒を飲んでることが自分にとっては許せないことになった。おかげで2週間で体重が4キロも減つた。

先に述べた幸福とは共存である、と最近分かったが、ただそれはあまりに遅かった。時間を取り戻すことは出来ないが、やり直すことなら出来るかもしれない。

私はやり直すことに決めた。

(エグゼクティブプロデューサー おおつきとしみち)

◇編集部より

今回の特集にあたり、「エヴァンゲリオン」のプロデューサーである、大月俊倫さんにインタビューをしました。その内容を原稿に起こし、大月さんに校正して頂いたところ、大月さんより「大変申し訳ないが、この原稿は没にしてほしい、代わりに自分が全て書き直したい」という連絡を受けました。

没にしたいという原稿は、大変におもしろかったので大月さんに復活の折衝をしました。しかし大月さんの意思は固く「とにかく書き直させてほしい」と。

新しく送られてきた原稿は、「一読すると「エヴァンゲリオン」とは全く関係のない、日常のエッセイでした、それも不思議な。「これを「エヴァ」の特集に載せてしまつていいのだろうか」と思いました。でも何度か読み返しているうちに、その不思議の中に「エヴァ」に関連する隠されたメッセージがあるのではないかと。そういえばエッセイのタイトル「やり直す」というのは新劇場版のティザーポスターに書かれた「過去にとらわれず」という庵野監督のメッセージと通じるものがあります。もしかしたら、これは「エヴァ」プロデューサー大月さんの戦略なのかもしれません。

「エヴァンゲリオン」は1000人の受け手がいれば、1000通りの解釈があるような不思議な作品です。その不思議な作品を作ったプロデューサーの不思議な原稿ということで、編集部ではそのまま掲載することとしました。